平安時代平象嵌技法の研究

西山要一

一、はじめに

平安時代の金工品に少数の平象嵌の遺品がある（挿図1）。古墳時代に始まる日本の象嵌技法の歴史をたどってみると、平安時代になって突如として平象嵌技法が出現するように思われるのである。

中国においては、早くも春秋時代に銅器に金銀象嵌で加飾することが始められている。当初より線を象嵌で表わす糸象嵌と面を象嵌で表わす平象嵌が並用され、戦国時代には鉄器の加飾にも広く行われ、漢代を通じて盛んに行われている。しかし、その後、この種象嵌は漸時減少し、隋唐代にはほとんど行われていない。

日本では四世紀に中国・朝鮮半島から象嵌遺品がもたらされ、五世紀にはその技術を会得して多くの象嵌遺品を製作するが、飛鳥・奈良時代以降は、細々と続けられていく。しかも、日本で製作された象嵌遺品はすべて糸象嵌であった。それが平安時代に突如として平象嵌遺品が出現してくる。

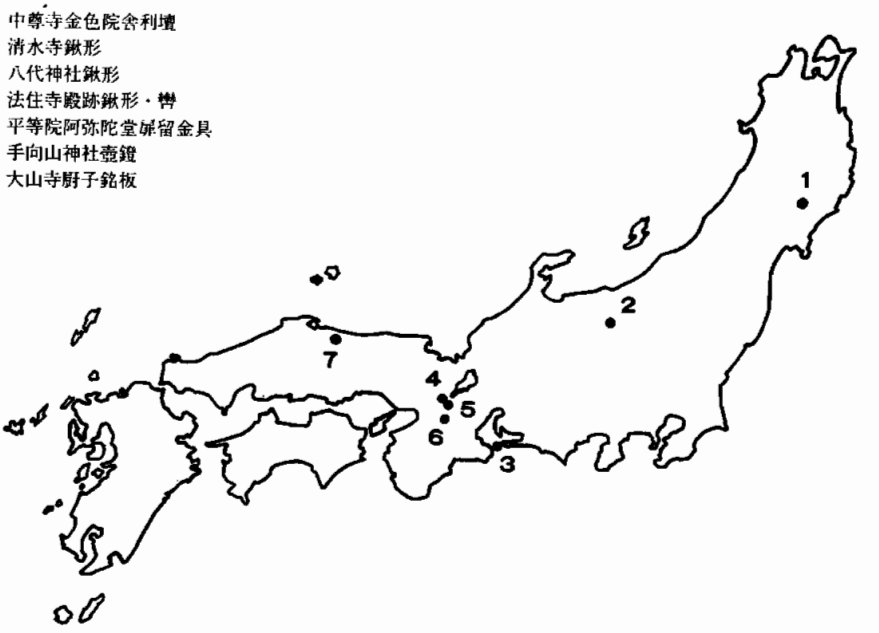
本稿は、全国に散在する平安時代平象嵌遺品を新しい研究手法である機器分析をも応用して詳細に調査検討し、その技法を明らかにするとともに日本における平象嵌技法の起源とその技術を継承した工人を解き明そうとするものである。

二、平安時代平象嵌遺品の諸例

(1) 中尊寺金色院舎利壇（岩手県西磐井郡平泉町）

奥州平泉に京の都の華麗な文化を花咲かせた藤原三代（清衡・元衡・秀衡）の遺体をまつる中尊寺金色院（金色堂）に象嵌のある舎利壇が伝えられている（写真1）。

舎利壇は舎利塔を奉安するための木製銅板貼りの台で、基壇と上壇の二段よりなる。基壇は一辺七三・五cmを計り、側面は三間にわけ、各間に銅板打出しの対向孔雀文を貼っており上下框と束には唐



挿図1　平安時代象嵌遺品分布図

草文を彫刻した金具を貼っている。基壇上面は平らな銅板を貼っている。上壇は四方に階段を設け高欄を巡らせ、框には唐草文を彫刻した金銅金具を貼っている。

象嵌は、基壇側面格狭間の対向孔雀文の左右に宝相華唐草文象嵌、基壇上面の四隅に蓮唐草団窠文象嵌として施されている。均整のとれたむだな空間を残さない華麗な象嵌文様である。

これらの文様は暗緑色の銅錆が舎利壇表面を覆う中に、銀のさびで変色した黒い象嵌文様として見てとれる。基壇上面の銅板の矧ぎ目にも黒色の線が見え、銀鑞付けによる接合であることが判明する。

本例の場合、保存状態が極めて良好で、象嵌剝落などの破損がなく、表面観察では象嵌技法についての手懸は得られないが、すくなくも銅地銀象嵌技法であることは明らかである。

他例とは材質に差が見られるものの、文様輪郭を断面V字形に深く彫り、その間を浅く削って、文様に切りとった銀板を嵌め込む平象嵌技法は共通するものと推測される。

なお、金色堂の建立は大治元年（一一二六年）、栄華を誇った伽藍のうち金色堂など数棟を残し、ことごとく戦火についえたのが文治五年（一一八九年）の源頼朝の奥州征伐である。本例は、この間に製作されたものであろう。

(2) **清水寺鍬形**（長野県長野市保科）

清水寺は長野市街を千曲川対岸に見る保科の山裾に位置する。征夷大将軍坂上田村麻呂が蝦夷征討の際、此地の神童の助けを得て勝利することができたので、その帰途、御礼として神童像八体とともに自から着用の冑の前立（鍬形）を清水寺に奉納したと伝えられている。

この鍬形は、全長四一・八㎝、台部幅一五・三㎝、左右角先の間一九・五㎝、厚さ二～〇・六㎜を計る（写真2の下、図1の1）。

鍛鉄によって台と二本の角を別造りし、金銅製花笠金具およびその上下二個の鉄鋲によって接合されている。金銅製の覆輪は台部の外縁のみに付され、台部上端の銅鋲（右側は二個、左側は一個）で固定されている。台正中の鎬を挟んで二孔一対、台上方左右に各二孔一対計三ケ所に穿たれた孔は冑鉢への取付け孔である。左右角先端にも各一孔が設けられている。飾房でも付したのであろうか。

雲竜文象嵌は鍬形台部にある。竜は左方に頭部をおき、左頭上より俯瞰する姿態で描かれている。右前足を顔前に直立させ、左前足は前方に延ばす。大きく描かれた口唇の先端からは雲気を吐く。頭上には二本の角をもち首の後ろに蓮台宝珠を付す。左後足は力強く下方に踏んばり、右後足は尻尾をからませて後方にはねる。背鰭、うろこ、蛇腹、毛を細かく描き、腹下に一雲を配する。鍬形台のU字形空間に制約されているため、不自然に胴が短かく獅子を思わせる姿態であるが、まさしく天空を駈ける竜である。

象嵌の雲竜文様は半ば剝落するが、剝落部分の細部を観察すると、文様の輪郭が断面V字形に深く刻まれ、その内部は浅く水平に削られているのが見られる。象嵌文様残存部には金色の部分と、これが磨耗して銅色を呈する部分のあることも観察される。したがって、本例は鉄地銅象嵌金鍍金の技法によるものであることが判明する。

(3) **八代神社鍬形**（三重県鳥羽市神島）

神島は伊勢湾口の真只中に位置する周囲約四㎞の小島で、古くより鳥羽・伊良湖岬間の海上交通の要衝として知られ、神島集落を見降す屋根上に位置する八代神社には、海上交通の安全・魚業繁栄を祈る祭祀品が今に伝えられている。金銅装椎頭大刀の柄頭や海獣葡萄鏡・石製模造品などの奉納品は、既に古墳時代にそうした祭祀が行われており、海の正倉院といわれる玄界灘の孤島沖ノ島の祭祀との類以を思わせる。

鍬形も奉納品の一つである。（写真2の上・図1の2）。鍬形は、清水寺鍬形と同じく台と角を別造りし鋲留する形式のものであるが、現在は台部のみが残存し、両角を欠いている。台の長さ一六・五㎝幅一五・八㎝、厚さ一～一・三㎜を計る。外縁部には金銅覆輪を付すが、台先端には及ばない。覆輪両端は小銅鋲で留めている。台先端には金銅製笠鋲が各一個付され、ここで両角を接続したものである。正中線の鎬を挟んで二孔一対、左右角元に二孔一対、計三カ所

に冑鉢への取付け用の孔が設けられている。

鍬形には獣面文（獅嚙文）が象嵌されている。大きく開く口からのぞかせる歯と牙、巨大な鼻、釣り上った目と眉、口上・眉上・耳上の髭と毛、いかにも何者をも寄せつけない強靭さと恐しさを感じさせる堂々たる獣面である。

象嵌の脱落している歯の部分を観察すると、四角い歯の輪郭が断面V字形の溝で刻まれ、その内部は浅く水平に削られている状態が見え、また、眉上の毛の脱落部分は断面V字形の細い線が刻まれているのが見られる。象嵌残存部の表面は滑らかで、にぶい茶色を呈する中に金色が見える。これらの観察から、この鍬形は鉄地銅象嵌金鍍金の技法によるものと判断される。

(4) 法住寺殿跡鍬形と轡（京都市東山区）

法住寺殿跡は京都市東山区の三十三間堂の東側に隣接する。一九七八年に財団法人古代学協会平安博物館によってホテル増築に伴う発掘調査が行われ、およそ三m四方の土壙から五個体以上の甲冑とともに象嵌文様のある鍬形と轡が各一点ずつ発見された。(註1)

鍬形は全長五一cm、厚さ〇・八～一・〇mmを計る（写真3・図1の3）鍛造鉄板一枚造り、金銅総覆輪である。正中線の鎬を挟んで二孔一対、台部から左右角部への移行部に、それぞれ二孔一対、計3か所に孔を穿ち、冑鉢への取付孔としている。

この鍬形の正中線鎬を挟んで左右対称に竜と雲を配している。相対する竜は大きく胸をはって頭をもたげ、大きく開いた口からは雲気を吐き、頭上に二本の角をもち首のうしろには火炎宝珠を飾る。片前足は胸元に、他方の前足は力強く下方に踏んばり、胴を鍬形のU字形に従って上方へと急角度で腕曲させつつ、後片足を前方に、他方の後足は尻尾をからませて後方に延ばす。力強い竜である。また竜の胸部前面、胴と尻尾の下方には間隙を埋める短かい雲文、尻尾後方から角先までは長く流麗な雲文を配している。

発見当時は全面鉄錆に覆れていた鍬形であるが、次章で詳述する通りX線写真、保存処理・文様表出時の観察と機器分析により、鉄地銅象嵌金銀鍍金の技法によるものであることが判明した。すなわち、鉄地に断面V字形の深い溝で文様の輪郭を刻み、内部を浅く削り、別に同大に切り抜いた銅板文様を嵌め込んで固定、象嵌部分全面を一担金鍍金したのちに、竜の角・瓜・雲気・雲文を銀鍍金するという細かい配慮がなされたものであった。(註2)

轡は、円形の鏡板、鏡板に鉄鋲留された立聞、二連式銜、引手金具、鏡板と銜と引手金具を連結する円環とからなる（写真4・図2の4）。鏡板は直径一〇・一cm、厚さ〇・二～〇・三六cmを計る中央で甲張りする形である。銜の断面は円形、立聞と引手の断面は長方形である。

鏡板には飛鶴文が象嵌されている。鶴は上方に首をもたげて前方

に嘴を突き出し、両翼を上下に大きく広げ、尾羽を後方になびかせる。下方の翼の前方には足と思われるものが描かれている。まさに地上より飛翔せんとする姿か、あるいは地上で大きく両翼を広げて舞っている様であろうか、華麗な鶴の姿である。鶴文の間隙には巧みな透しがもうけられている。

鏡板に鋲留された立聞の軸に花蕾文、環に波状文が象嵌され、また引手金具の軸に草花文、環に波状文が象嵌されている。

轡は鍬形同様に、発見された当初は鉄錆に覆れていたが、X線写真撮影の結果、象嵌文様の存在が確認され、保存処理・文様表出の過程における観察・分析により象嵌技法が明らかになった。表面観察の結果、鍬形や他例と同様な技法であろうと予側していたが、特に鶴の羽の破損断面のX線マイクロアナライザー分析によって、象嵌の断面を画像でとらえることが出来たのは大きな成果であった。この分析等の結果は次章で述べるが、本例も鉄地銅象嵌金鍍金の技法によるものであることが判明した。

なお、鍬形・轡とともに甲冑五個体以上を出土した土壙について発掘調査担当者は、寿永二年（一一八三年）の法住寺合戦の際、木曽義仲にせめられ戦死した後白河法皇方の戦死武将を葬祭した墳墓堂遺構であろうと推定している。

(5) 平等院阿弥陀堂扉留金具（京都府宇治市）

藤原頼道発願による平等院阿弥陀堂は、前面に池を配し、本堂を中心にして両側に翼廊、後方に尾廊をもつ飛ぶ鳥の如くの平面形をもち、かつ阿弥陀堂棟端の2羽の鳳凰の飾りのあることから鳳凰堂とも呼ばれている。また堂内の阿弥陀像をはじめ、四方の扉内面の浄土絵図、奏楽飛天像、きらびやかな装厳は、まさにこの世に極楽浄土を創り出している。

今、屋根上の鳳凰、絵扉は保存のために収蔵庫に移されているが、建築は幾度かの修理が加えられているものの創建当初の姿を伝えている。

象嵌のある扉留金具は、阿弥陀堂正面の上品上生図扉の留金具二個、左側面の中品上生図扉の留金具二個の計四個あり、形制・装飾文を同じくし、今も留金具の機能を果している。(写真5の上・図2の5)。

扉留金具は二枚の座金と環および環取付からなる。二枚の座金のうち、上段座金は直径四・九cm、厚さ〇・二cmの銅製で、一四葉の輪花を彫刻している。下段座金は直径九cm、厚さ〇・二cmの鉄製で四稜形をなし、四稜の接点には小さな心葉形の透しをもうけている。象嵌は稜縁のやや内側を縁どる巾広の線と、内側に四弁の宝相華文として見られる。四弁のうち内側の花弁は方形環取付けの下に隠れている。環取付は鉄製で、一辺二・五cmの直方体の角を切り落した一四面体である。このうち上面と二側面に四弁宝相華文、角を栽断

した三角面八カ所には短小の蔓文をそれぞれ象嵌している。二側面は環を通すため象嵌はない。環は直径〇・八㎝の鉄棒を外径七・四㎝の円環としたものである。

四稜形座金具と環取付の象嵌細部を観察すると、いくつかの特徴を見い出すことができる。すなわち、環取付角面の蔓形文様の象嵌線幅は〇・五―〇・七㎜と細く、剝落部の講は断面V字形を呈し、糸象嵌の技法であることがわかる。また四稜形座金の縁取り象嵌線の幅は一・二～一・四㎜、厚さ約〇・三㎜、剝離部の観察では、この細い線の両脇に断面V字形の深い溝を刻み、この間を浅く削っているのが判る。これは宝相華文の剝落部にも見え、平象嵌の技法であることがわかる。環取付上面の宝相華文弁間の菱形文は輪郭の一部のみ残されているが、本来菱形文に平象嵌されていたのが磨耗して菱形文輪郭の深い断面V字形溝に入っていた象嵌部分だけが残存したのである。象嵌残存部表面は銅色を呈し、部分的にではあるが金色も残っている。これらの観察から、本例は鉄地銅象嵌金鍍金の技法であることが判明する。

なお、本例は阿弥陀堂創建当初のもの、すなわち天喜元年（一〇五三年）の製作で、平安時代象嵌遺品の中でも年代の確定し得る貴重な資料である。

(6) 手向山神社壺鐙（奈良市雑司町）

東大寺鎮守である手向山神社には数多くの馬具が神宝として伝えられているが、中に象嵌のある鉄製壺鐙二点が知られている（写真5の下・図2の6）。

一は鉸鎖を含め総高三一・六㎝、壺の長さ二〇・二㎝、幅一四・七㎝を計り、他の一は総高二九・五㎝、両者ほぼ同形同大のもので、かつ象嵌文様の意匠も同じであるが、一対をなすものではない。壺は鉄鍛延によって正面に五角形の平坦部を造り出し、平中線の鎬と上面の左右、さらに低部両側に稜線を造り出している。壺口には断面蒲鉾形の縁金を周らせ下部には平板状舌、上部には鉸鎖取付のための方形部を造り出し、壺には鉄鋲で固定している。鉸鎖は兵庫鎖形式であるが打ちたたいて連結部を固定している。

象嵌は壺・壺口縁金具に見られる。壺正面に一個、上部鎬線上に二個、両側面に三個ずつ、計九個の大小の宝相華文とそれらを結ぶ蔓文が配され、また壺口縁金具には宝相華文と唐草文が配されている。華麗に装飾された鐙であるが、象嵌の半ばは剝落している。

象嵌の剝落部分を観察すると、宝相華文の輪郭は断面V字形の鋭い溝で刻まれ、その内部は浅く削られている鏨使いの痕跡まで見ることができる。また蔓の象嵌線が半ばめくれ上っている部分は断面V字形の鋭い鏨溝と、その形どおりにめくれ上った象嵌線が見られる。象嵌の残存部分の表面はやや緑色がかった銅色、破断面は銅色、

表面には金色を呈する部分もある。

こうした観察結果から、本鐙は鉄地銅象嵌金鍍金の技法によるものであると判明する。本品の来歴は詳らかではないが、形態・文様から平安時代の作例と考えられる。

(7) 大山寺厨子銘板（鳥取県西伯郡大山町）

山岳信仰の寺院として著名な伯耆国大山寺には奉納由来の銘文を付した鋳鉄製厨子がある。三度の火災に遇い破損したが今は復原されている。この厨子は複弁八葉反花形の台、円窓に地蔵菩薩の種子を陽鋳する筒形の身、笠形の蓋の三部を積み重ね、総高七四・二㎝を計る。厨子とともに鋳鉄製地蔵像断片と厨子表面に取付けていた鍛鉄製銘板三枚が伝えられている（写真6・図3）。

銘板はもと四枚あり、江戸時代寛政年間の火災で二枚目を失ったといわれる。しかし、消失した二枚目を含めて四枚すべての拓本があって、その記述内容が明らかにされている。

さて、現存の三枚のうち、一枚目と四枚目はそれぞれ九七文字と六二文字を七行に割かって縦三五・五㎝、横二〇・八㎝に、三枚目は八八文字を六行に割かって縦三五・五㎝、横一八・八㎝の鉄板に刻んでいる。したがって今は失われている二枚目は九一文字を六行に割かっているので三枚目と同じ縦三五・五㎝、横一八・八㎝の鉄板であったろうと思われる。

合計三三八文字よりなる銘文は、伯耆国会東郡の地主である紀成盛が、承安元年（一一七一年）に焼失した大山寺宝殿ならびに本尊の再建に尽力し、同二年には大山権現である金銅地蔵菩薩を延暦寺僧西上をして作らしめ、同三年には宝殿を完成させ、一山あげての遷宮行事を行ったこと、この功徳により一族が繁栄することを願う思いなどを記し、大山寺史ばかりでなく、年代の確定し得る資料として金工史にも貴重なものとなっている。

かって、陰刻文字であろうとか、銀象嵌文字であろうとか議論された銘板であるが、表面観察とX線写真および螢光X線分析によって、その技法を明らかにすることができた。鉄板は火災で表面を焼かれて錆が剝落し、大きく変形しているが、文字の状態に二様のあることが観察された。一は文字表面が鉄板と同一であって銅色を呈するもの、他の一は陰刻の文字で輪郭を深く断面V字形に刻み、その内部を浅く削っているもので、ほとんどの文字は後者の状態にある。X線写真では、前者は周囲の鉄板より明るい文字に映し出され、鉄よりも質量の大きい金属が象嵌されている可能性を示し、螢光X線分析によって、この銅色の金属が銅であることを確認した。後者はX線写真には周囲より暗い文字として映し出され、特に文字の輪郭がさらに暗い線で縁どられている。後者の文字のいくつかに直径〇・五～一㎜くらいの銅色の粒の付着するものがあり、X線写真には明るい粒として映し出された。これは銅粒であろうと推定した。

これらの調査の結果、前者の文字はおおむね原形を保ち、後者の文字は火災によって銅象嵌文字が溶融して流れ出し、鏨彫りの陰刻文字が表われたものと考えられる。銅の小粒は溶融した銅が丸粒となり冷え固ったものと思われる。したがって本例も、鉄地銅象嵌の技法によるものと判明したが、文字表面を金銀鍍金したか否かの確証は得られていない。

承安三年（一一七三年）製作の実年代を知り得る貴重な遺品である。(註3)

三、機器分析による材質・技法の研究

平安時代象嵌遺品の多くは、およそ九〇〇年間の伝世のあいだに、あるいは土中に埋もれているあいだに腐蝕が進み、象嵌部分が剝離するなどの損傷が見られる。この損傷部分をルーペなどを使って観察することによって象嵌技法の大略を推測することができた。

すなわち、平安時代象嵌技法は、糸象嵌と平象嵌の二種が行われていて、糸象嵌は地金に断面V字形の鋭い溝を鏨で刻み、銅板を切り抜いた細い線を嵌め込んだのち金銀鍍金を行い、平象嵌は地金に文様の輪郭を断面V字形の深い溝に鏨で刻み、その内部を浅く削ったのち、銅板を同形同大に切り抜いた文様・文字を嵌め込み、金銀鍍を行っている。鉄地銅象嵌金銀鍍の技法である。

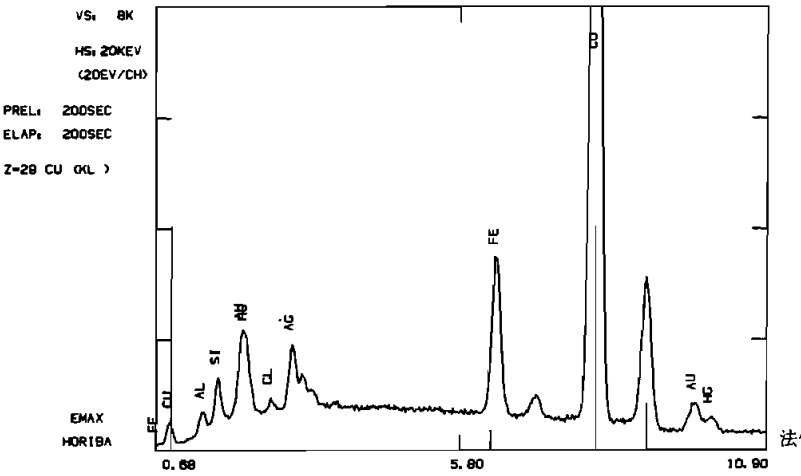
中尊寺金色院の舎利壇は銅地銀象嵌と他例とは材質を異にするが技法は同じである。糸象嵌といえども平象嵌と同じ手順で行っていることが推測されたのである。

さて、これらの遺品の中で、大山寺厨子銘板、法住寺殿跡鍬形、同轡はX線写真撮影と機器分析を行う機会に恵れた。大山寺厨子銘板と法住寺殿跡鍬形については既に結果を公表しているが、その後、再度鍬形の分析を行ったので、轡とともにその結果を検討する。

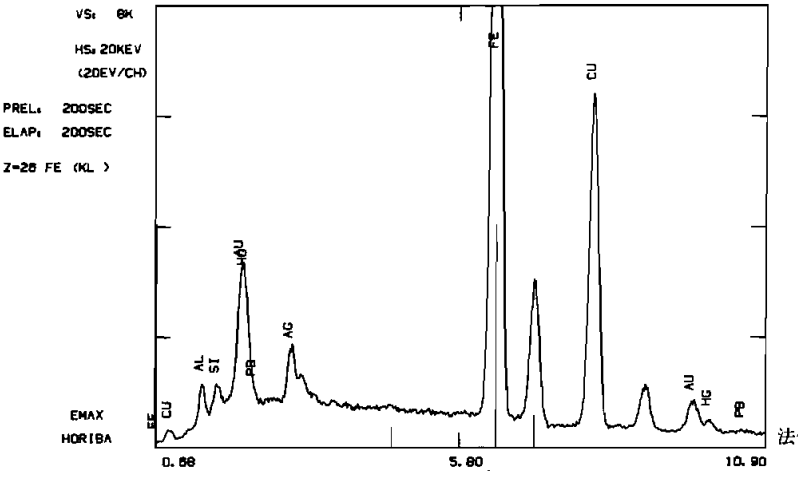
なお、法住寺殿跡鍬形と轡は、前述のように一九七八年に多量の甲冑とともに発掘された。出土当初は全面を錆に覆れ形すらも判然としなかったが、X線写真撮影の結果、それぞれの形態を明瞭に確認するとともに、鍬形には雲竜文、轡には飛鶴文の象嵌が確認されたのである。その後の科学的保存処理・象嵌文様表出に伴い材質分析など綿密な分析研究を行ったものである。

(1) 法住寺殿跡鍬形の材質分析と技法

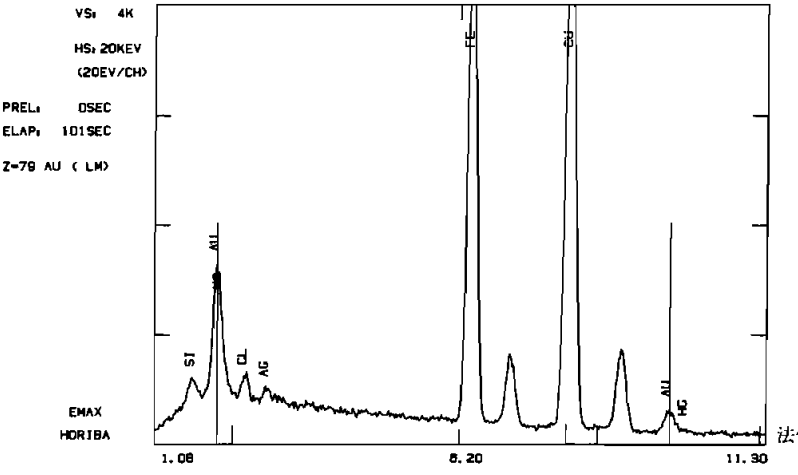
鍬形の科学保存処理を行った一九八四年当時にX線マイクロアナライザーを使った元素分析を行った。分析対称は、鍬形にむかって右側の竜の尻尾付根付近の表面分析、左後足下の雲文の表面と断面の分析である。その経果、金色の竜の体である前者は、主として金・銅・鉄が検出され、象嵌剝離の状態をも照らしあわせて、鉄の上に銅、銅の上に金がのる、すなわち、鉄地銅象嵌金鍍金であること



法住寺殿跡鍬形断面定性分析



法住寺殿跡轡表面定性分析



法住寺殿跡轡断面定性分析

挿図２　法住寺殿跡鍬形と轡のＸ線マイクロアナライザー分析（定性分析）

が考えられた。銀色を呈する後者は、表面分析では銀・水銀・金・銅・鉄が検出され、他の雲文部の剝離した断面の分析では、銅・金・銀・水銀が検出され、銅の上に金・銀・水銀が混在していることが判明した。水銀は鍍金に使用されたものであることはわかるが、表面色が銀色を呈しているにもかかわらず、銀に匹的するくらいの金の分布が見られることについては、銀の精練工程で分離しきれなかった金が残っているのであろうかとか、色調の調整のために入為的に金を混入したのであろうとか、銀色を鮮やかにするために金鍍金の上に銀鍍金を重ねたものであろうか、など種々の推測がなされたものの、どれも決め手に欠け、一応、鉄地銅象嵌銀鍍金の技法とした。

この疑問を解くために今回、再度雲文部断面のX線マイクロアナライザー分析を行った。分析資料は前回と同じく右竜左足下の雲文とした（挿図2の上・写真7の右列）。断面の定性分析では、銅・鉄・金・銀・水銀を検出した。さらに元素分布分析を行ったところ、銅の上に金層があり、金層の上に銀と水銀が重っていることがかろうじて判別し得た。金層と銀・水銀混在層は、それぞれ約五ミクロンの厚さであった。

なお、金鍍金・銀鍍金ともに水銀を使ったアマルガム法によるものと推定しているが、金鍍金層からは水銀が検出されず、銀鍍金層からは相当の残留水銀が検出されている。金鍍金よりも銀鍍金の方が水銀が残留し易いという化学的特性があるのか、あるいは金鍍金と銀鍍金を行う際の技法的差異によるものかは判然としない。

(2) 法住寺殿跡轡の材質分析と技法

轡の分析も科学保存処理・文様表出の機会に行った。

分析に共した資料は、左側鏡板飛鶴の首上半部と首のつけ根胴上部の二ケ所の断片である。（挿図2の中・下）。

首上半部の資料は、やや白っぽい金色を呈する首と地金である鉄地との境界線付近で、象嵌部は腐蝕のため細かく剝離している。表面の定性分析では、鉄・銅・金・銀・水銀が検出され（挿図2の中）元素分布分析では、二次電子像の上側三分の一は鉄地、下側三分の二は象嵌（鶴首）であるが（写真7の中列と左列上）、鉄の分布でもわかるように象嵌はかなり腐蝕が進んで剝離し、下地の鉄が広く露出している。銅は象嵌の鉄地の露出していないところに分布し、かろうじて剝離の免れた部分である。金・銀・水銀は銅に重なる。したがって、鉄地銅象嵌の表面に金・銀を水銀のアマルガムで鍍金したものであることがわかる。ただ、肉眼ではやや白い金色に見えるこの部分に、銀が相当量含まれかつ水銀も相当量残存することから、当初、金鍍金上に銀鍍金されていた可能性も考えられる。

鶴首のつけ根・胴上部では断面を分析した（挿図2の下）。この付近の象嵌表面は銅色を呈する。馬に轡を装着した場合に引手が擦れ

表1　平安時代象嵌遺品一覧表

	名称	点数	象嵌文の種類	象嵌の技法		製作年代	所蔵者
1	中尊寺金色院舎利壇（岩手県西磐井郡平泉町）	1	蓮唐草団窠文 宝相華唐草文	銅地銀象嵌	平象嵌		金色院
2	清水寺鍬形（長野県長野市保科）	1	雲竜文	鉄地銅象嵌金鍍金	糸・平象嵌		清水寺
3	八代神社鍬形（三重県鳥羽市神島）	1	獣面文（獅嚙文）	鉄地銅象嵌金鍍金	糸・平象嵌		八代神社
4	法住寺殿跡（京都府京都市東山区）　鍬形	1	雲竜文	鉄地銅象嵌金銀鍍金	糸・平象嵌	寿永2年（1183年）	木下美術館
	轡	1	飛鶴文・花蕾文・草花文・波状文				
5	平等院阿弥陀堂扉留金具（京都府宇治市）	4	宝相華文・蔓文	鉄地銅象嵌金鍍金	糸・平象嵌	天喜元年（1053年）	平等院
6	手向山神社壺鐙（奈良県奈良市雑司）	2	宝相華文・唐草文	鉄地銅象嵌金鍍金	糸・平象嵌		手向山神社
7	大山寺厨子銘板（鳥取県西伯郡大山町）	3	文字（338字）	鉄地銅象嵌	平象嵌	承安3年（1173年）	大山寺

る部分である。断面の二次電子像（写真7の左列の中3枚）に見える資料の厚さは右端が二㎜、左端が一・八㎜ある。鉄の分布を見ると上方に〒の空白部があり、上面を鉄がうすく覆っている。銅の分布はこの鉄の空白部に合致する。すなわち、鉄地銅象嵌の断面がここに鮮明にあらわれたのである。

銅色に見える象嵌表面に鍍金がなされていたか否かを確認するため、四〇〇〇倍に拡大して分析したところ（挿図2の下）、金・銀・水銀を検出することができたので、当初は金・銀鍍金されていたものが、引手により磨耗したものであることが確かめられた。また、左翼つけ根部分の断面でも両端が深くV字形にくいこんだ銅象嵌の断面を観察することができた（写真7の左列下）。

前章の種々遺品の表面観察から推定していた象嵌技法が分析結果からも証明されたことになる。

四、平安時代平象嵌技法の創始

平安時代象嵌遺品の技法・材質・製作年代等を表にまとめた（表1）。平安時代の後半二〇〇年のあいだに華開いた平象嵌技法の起源はどこに求められるのであろうか。

現在、日本で製作されたと思われる最古の象嵌遺品は、千葉県市原市稲荷台一号墳の王賜銘鉄剣（五世紀中頃）であり、日本に齋ら

された中国製の象嵌遺品としては中国漢代中平年間（一八四～一八九年）に製作された東大寺山古墳中平紀年大刀、百済から齎らされた象嵌遺品としては泰和四年（三六九年）に百済で製作された石上神社七支刀がある。

これらは、いずれも鉄刀剣身に金銀を糸象嵌技法で銘文としたものである。糸象嵌技法の存在を中国・百済から学び、五世紀の百済や伽耶地方から渡り来た金工によって技術が齎らされ、以後古墳時代の約二〇〇年間に多量の象嵌遺品が製作され、飛鳥・奈良時代へと受け継がれていく。

古墳時代、刀剣・刀装具を中心に二五〇例ばかり知られる象嵌遺品のほとんどが糸象嵌である中に、わずか三例であるが平象嵌の遺品がある。大分県日田市東寺古墳の鉄鏡・帯鉤・飾り金具である。鉄鏡は金銀錯嵌玉龍文鉄鏡とよばれ金銀象嵌の雲竜文と玉で美しく飾られた中国漢代の作品で、六世紀頃に日本に齎らされたものであろう。平象嵌遺品はこの時代、確実に日本に齎らされていたもののその技法は遂に根付くことがなかったようである。

さて、中国春秋戦国時代に始まり、漢代へと発展・継承されてきた平象嵌技法は、日本の平安時代の平象嵌技法の直接の源流であろうか。写真八に示した金錯銀帯鉤すなわち、銀地金象嵌帯金具は中国戦国時代の典型的な遺品である。金の糸象嵌・平象嵌の渦雲文で全体を飾り、先端は獣頭としている。象嵌の剝落した部分を観察すると、糸象嵌部は鑿で断面V字形に鋭く刻んだ溝が見られ、平象嵌部は文様輪郭を鑿で断面V字形に深く刻み、その内部を浅く削っているのが見える。この技法は、平安時代平象嵌技法と合致する。しかし、残存している平象嵌部を観察すると、長さ三～四㎜の金銀板を並べて嵌めこんでいる、すなわち、金銀板を継ぎ矧ぎして文様象嵌としているのが見える。平安時代平象嵌に見られるように、一枚の銅板・銀板から大きな一つの文様を切り取り象嵌するのとは大きな相違があると言わざるをえない。

金銀板で文様を切り抜いて嵌め込むものといえば、平脱・平文の技法がある。中国唐代に盛行する技術で、木製・皮製の箱、銅鏡背面などに漆を塗り重ねる途上に金銀文様を貼りつけて漆の中に塗り込め、のち文様表面の漆を割りとって表わす技法である。貝を切り抜いた文様を漆の中に埋め込み、のち表面の漆を割りとり表わす螺鈿の技法と同一のものである。正倉院には漆胡瓶・金銀平脱皮箱・金銀平文琴など多くの平脱・平文の作品が伝えられている。黒漆の中に飛び交う金銀の鳥、咲きほこる金銀の花、これらは金属の鋭さ、冷たさは微塵も感じさせず、逆に漆の柔和さ、暖かさを極立させている。

平安時代の平象嵌技法は、中国春秋戦国時代に始まる平象嵌技法と、中国唐代に始まる平脱・平文技法が、日本において合体し創り出されたものではないかと考える。平安時代象嵌遺品の多くが鉄地

銅象嵌金銀鍍金であり鉄地表面をタンニンを使って不動体の錆、すなわち内部まで錆が進まないように保護錆を作って黒色にさせ、そこに金銀の動物や草花を浮かび上らせる。これは、まさに黒漆地に金銀の動物や花を躍らせる平脱・平文の効果と同じものである。鍬形・轡・金具・銘板といった金属品に必要な強靭性と、古代日本人好みの漆や木の柔かさ、暖かみをあわせもつ作品の技術として、平安時代平象嵌技法が創り出されたのであろう。

さて、平安時代象嵌遺品を製作した工人についての記録は、現在のところ見い出すことはできない。

大山寺厨子銘板によれば、大山権現である金銅地蔵尊は「鋳像師延暦寺僧西上」によって製作されたことがわかる。延暦寺の伽藍建立・維持機構として存在したであろう、延暦寺付属の鍛治・鋳造工房を率いたのが西上であることを推測せしめる。また、紀成盛の地蔵尊造立・宝殿再建の作善を記念する遷宮行事にあたって検校をつとめた南光院基好が、天台座主慈鎮や臨済宗開祖栄西の師であることなどを考えあわせるならば、平象嵌銘のある銘板作成に延暦寺付属の工房または京の都の工人が関与していたことは想像に難くない。

中尊寺金色院舎利壇もまた、そうしたことを窺わせる。藤原清衡・基衡・秀衡が奥州平泉に京の文化と極楽浄土を現出せしめるため、法勝寺や平等院にならって中尊寺、毛越寺、無量光院を建立し、京の町にならって町割し、佛殿装厳具、佛具、日常什器から芸能にいたるまで京の都そのものをもちこんだ。金色院舎利壇は、まさしく京の都で作られ平泉の地に齎らされたものか、あるいは京の工人が平泉におもむき製作したものであろう。

法住寺殿跡鍬形と轡は後白河法皇方の武将のものと考えられており、平等院阿弥陀堂扉留金具とともに京の工人の手になることは明らかであろう。

清水寺鍬形は坂上田村麻呂が奉納したとする伝説はともかくとして、京より東海道・中仙道を経て越中・越後へ、あるいは武蔵・毛野に通じる交通の要衝にあり、同様な意味において、京より東国への海上交通の要衝にあたる八代神社の鍬形についても、京で製作されたものとすることができよう。

さらに、平安時代の文献に見える象嵌刀剣として坂上田村麻呂将軍剣(『昭訓門院御産愚話』)と相応和尚剣(『明匠略伝』)がある。前者は坂上田村麻呂が朝廷より下賜された剣に坂上家の宝剣であることを漢字二三文字の金象嵌で刻ませたもの、後者はペルシャより伝来の剣に相応和尚が不動明王慈護之明を、漢字か梵字かは詳かではないが金象嵌で刻ませたもので、ともに糸象嵌であろうが、京の都に象嵌技術が継承されており、新らしい平象嵌技法を生み出す素地が充分に培われていたことを示している。象嵌工人を知る直接の資料は皆無であるが、これらの、いわば状況証拠によって、平安時代平象嵌遺品は京の工人の手になるものとしてよいであろう。

〔謝辞〕　本稿に関する遺品の調査ならびに分析等にあたり、多くの方々にご指導・ご援助いただきましたことに対し末筆ながら御名を記し感謝申し上げます（敬称略）。

中尊寺、同・北嶺澄仁、清水寺・北野隆雅、八代神社、平等院、手向山神社・上司延武、大山寺・清水豪映、木下美術館・坂元正典、同・新納義雄、同・槙岡謙太郎、同・大曽根康博、大和文華館・村田靖子、岩手県立博物館、同・赤沼英男、文化庁・三輪嘉六、東京芸術大学・中野雅樹、同・田中勇、(財)古代学協会・片岡筆、堀場製作所・森田洋二、同・渡辺研一、奈良国立文化財研究所・沢田正昭、同・肥塚隆保、奈良国立博物館・坂田宗彦、同・前島己基、(財)元興寺文化財研究所・浅野清、同・増澤文武

〔註〕

(1) 片岡筆「平安時代の甲冑・武具を出土した土壙――W一〇土壙――」（財団法人古代学協会『法住寺殿跡』一九八四年）

(2) 西山要一「雲龍文象嵌鍬形の保存処理・材質分析とその製作技法について」（財団法人古代学協会『法住寺殿跡』一九八四年）

(3) 西山要一「伯州大山寺蔵厨子銘板の科学分析による製作技法の研究」（奈良大学文学部文化財学科『文化財学報』第四集　一九八六年）

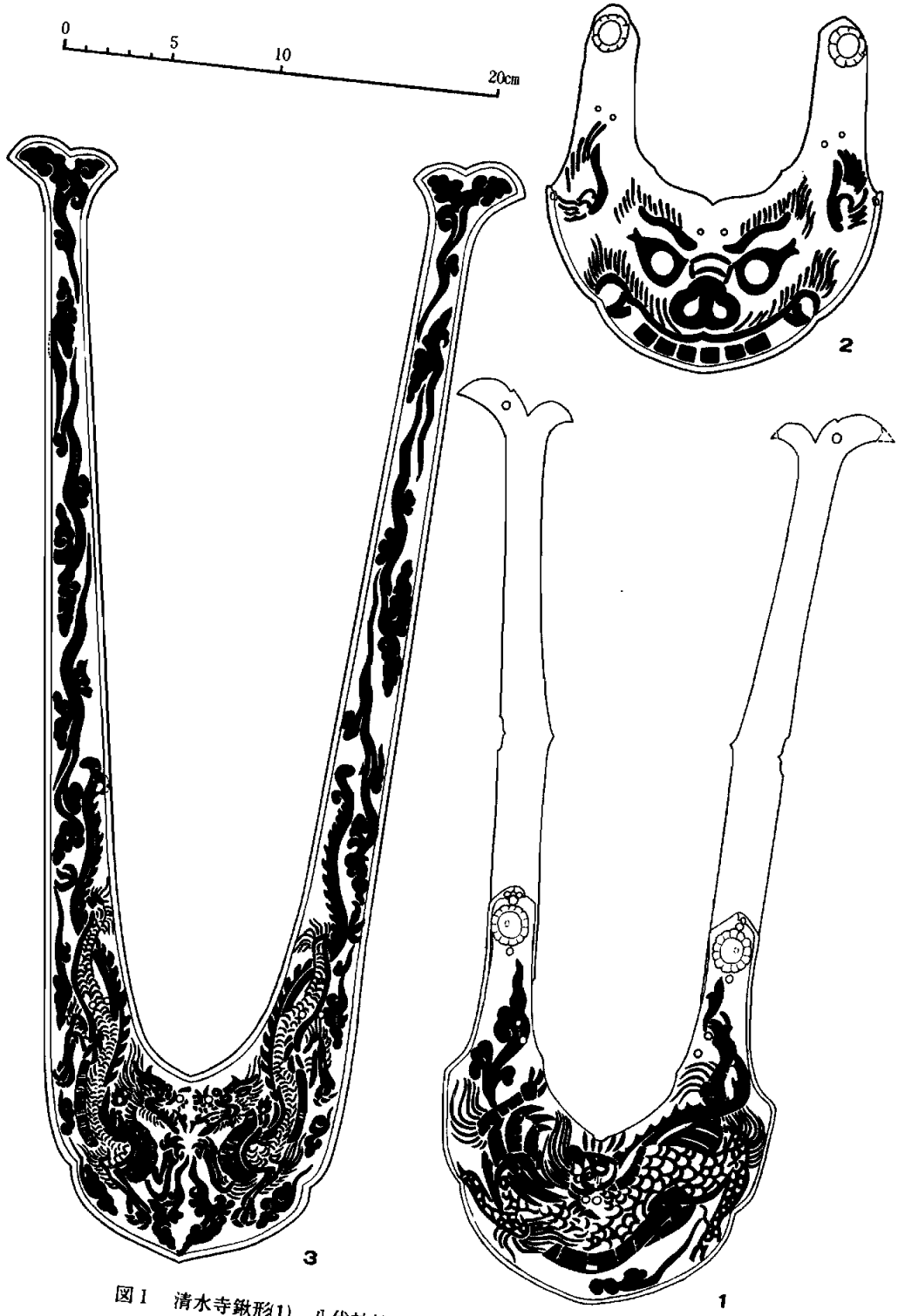


図1　清水寺鍬形(1)、八代神社鍬形(2)、法住寺殿跡鍬形(3)

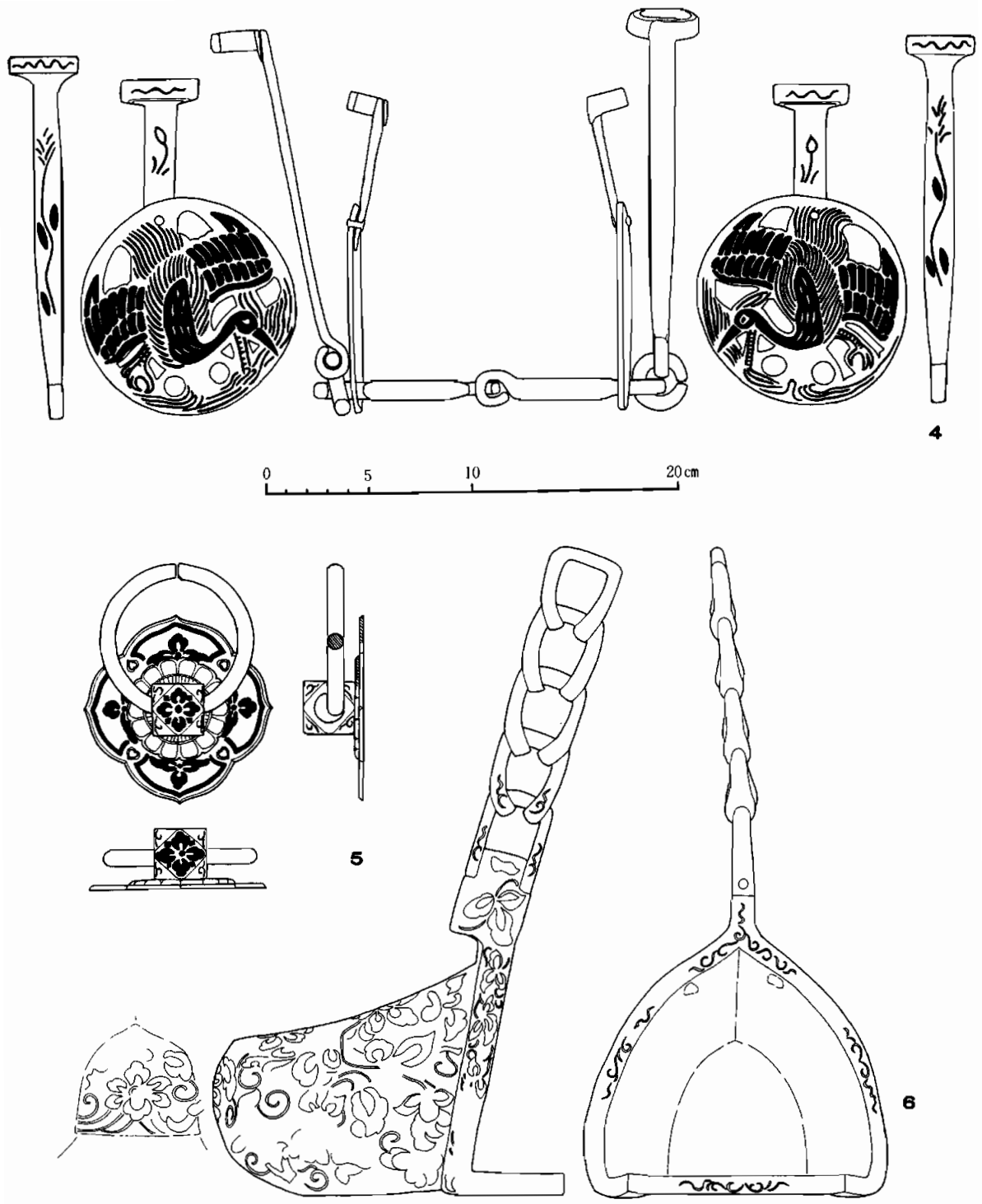


図２　法住寺殿跡轡(4)、平等院阿弥陀堂扉留金具(5)、手向山神社壺鐙(6)

本朝伯州會東郡地主紀成盛記文

本系紀納言

于時承安二年壬辰十一月廿日丙奉鑄
大山權現御躰三尺金銅地藏菩薩一
軀即鑄鐵厨子奉安置之是無窮之計
也抑此願之起去年七月廿八日乙未夜
御寶殿并御正躰炎上因茲道俗男女
間今加長警同三年癸巳八月廿二日壬午
遷宮是則天神地祇不助成者豈遂此
大願哉上始自　聖朝下迄于庶民悉
依當山之靈驗併誇願海之成就加之
始自願主成盛及于子子孫孫永預擁
現之利益久期榮幸之繁昌焉

鑄像師延暦寺僧　西上

願主　紀成盛

大行事寶殿檢校南光院遍照金剛　基好

證署

西明院院主大法師　潛秀
南光院別當大法師　基俊
中門院座主大法師　俊操

図3　大山寺厨子銘板

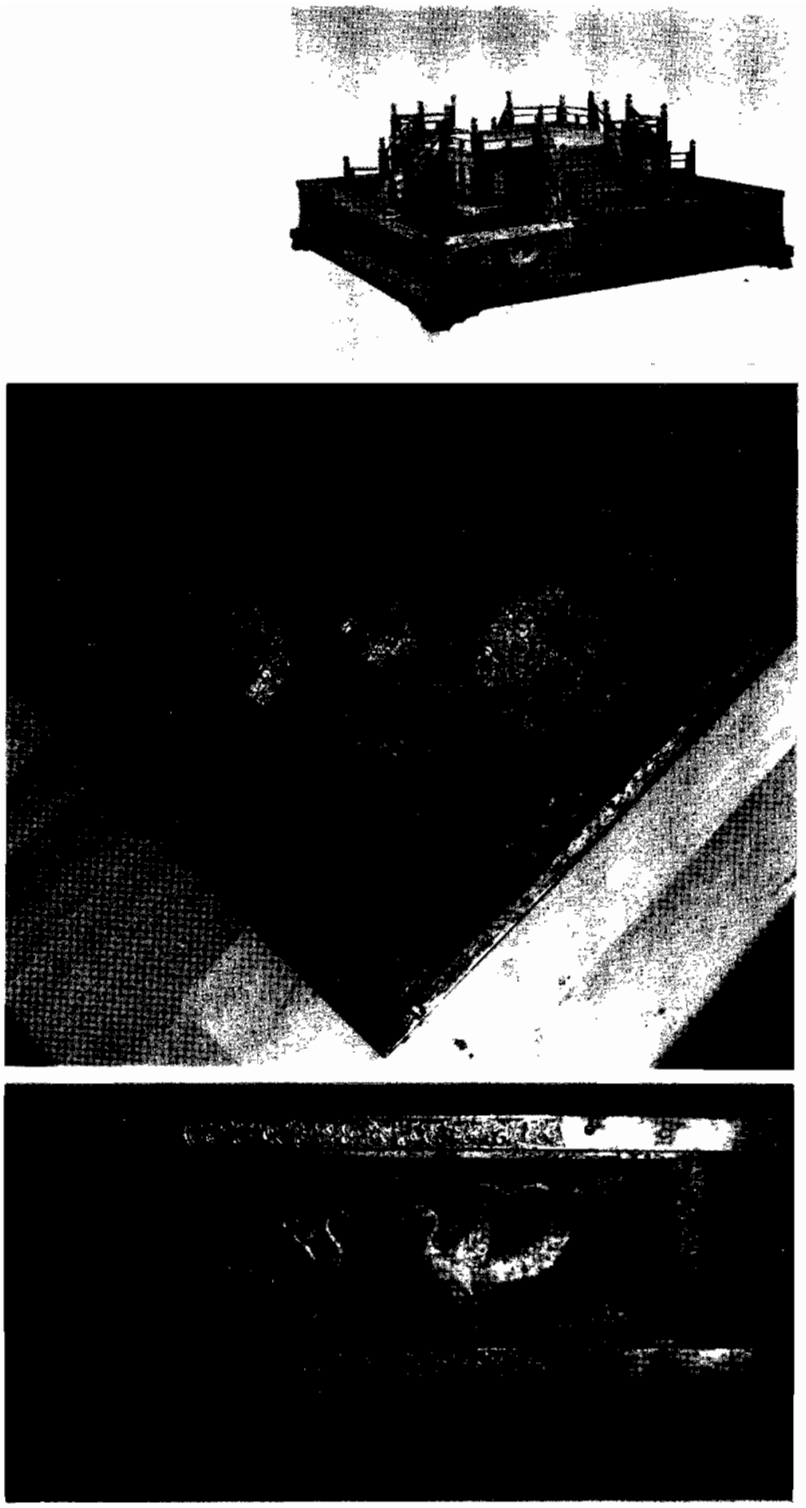


写真 1　中尊寺金色院厨子壇

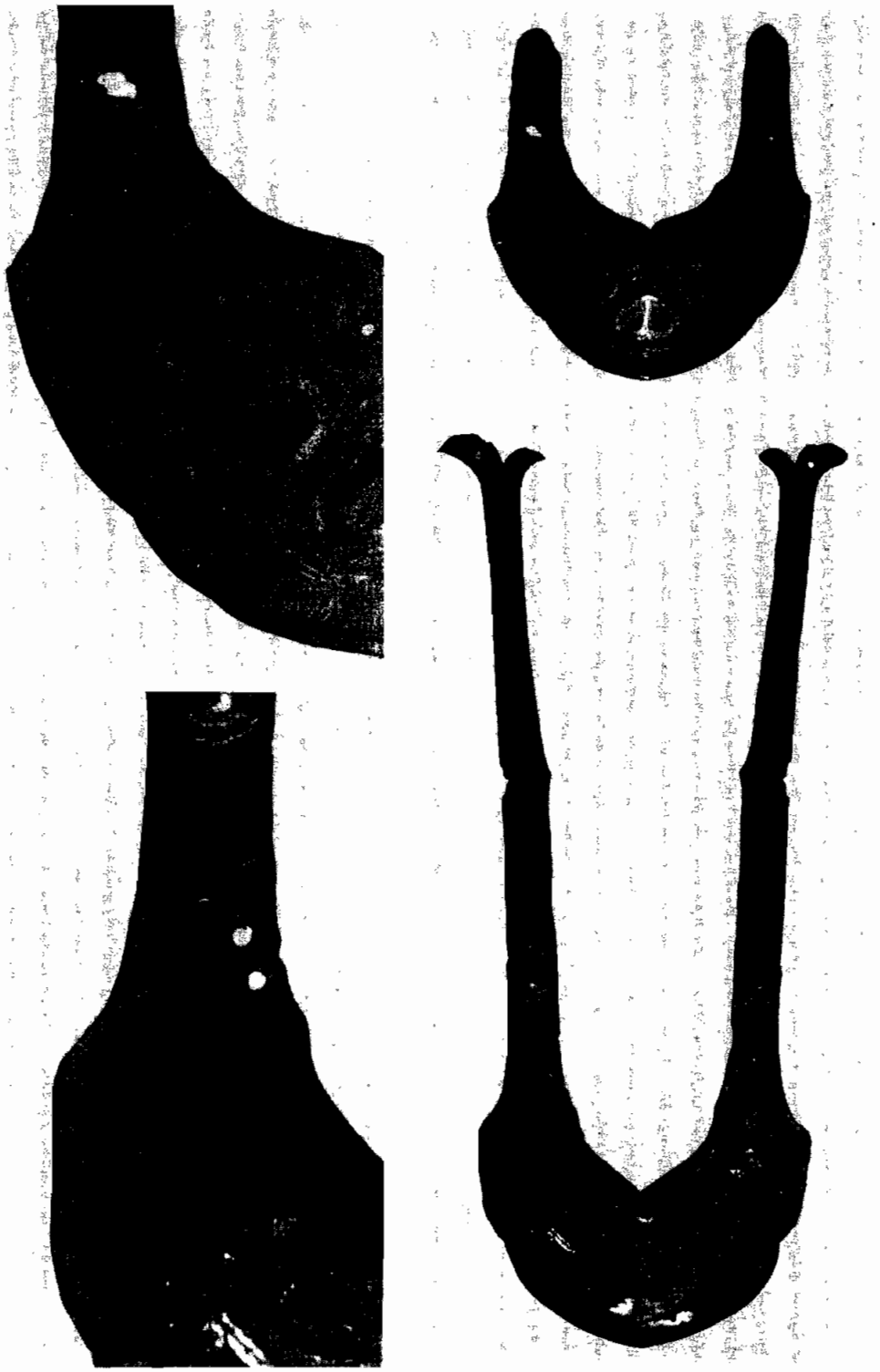


写真２　清水寺鍬形（下左右）と八代神社鍬形（上左右）

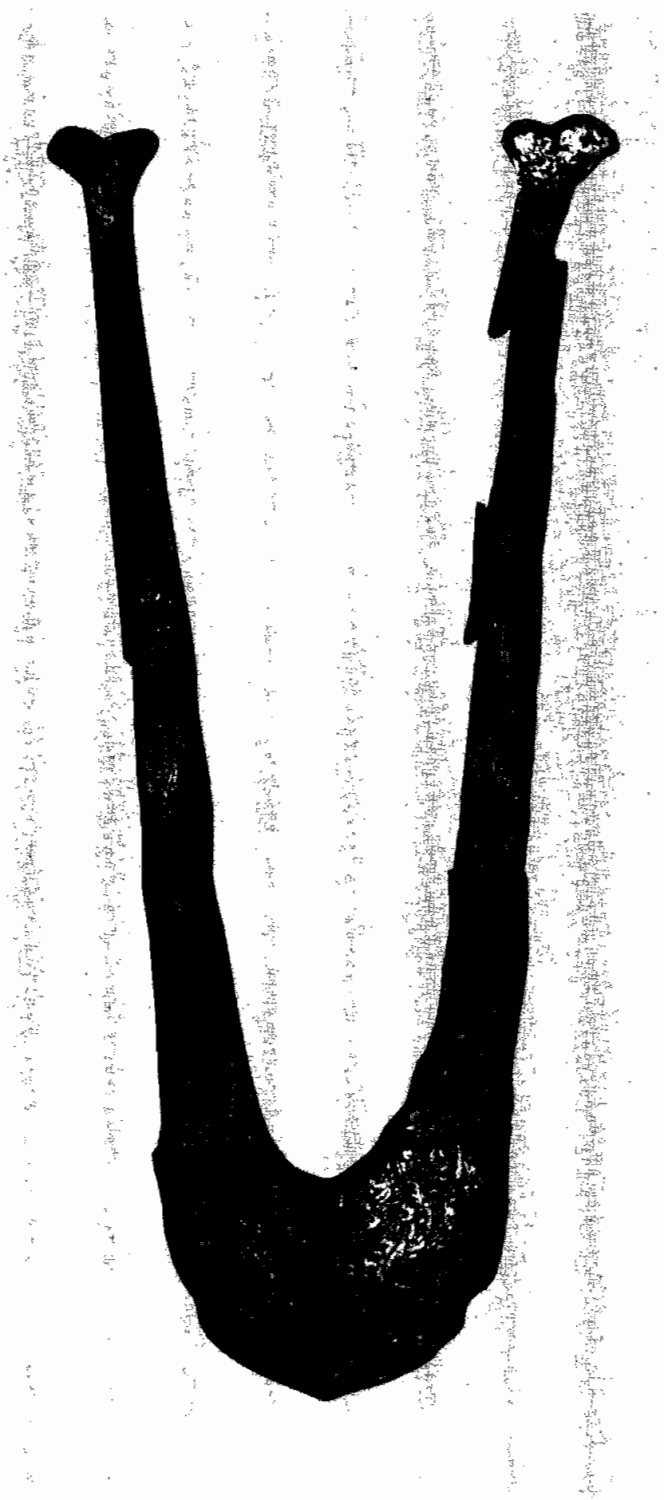


写真 3　法住寺殿跡鍬形

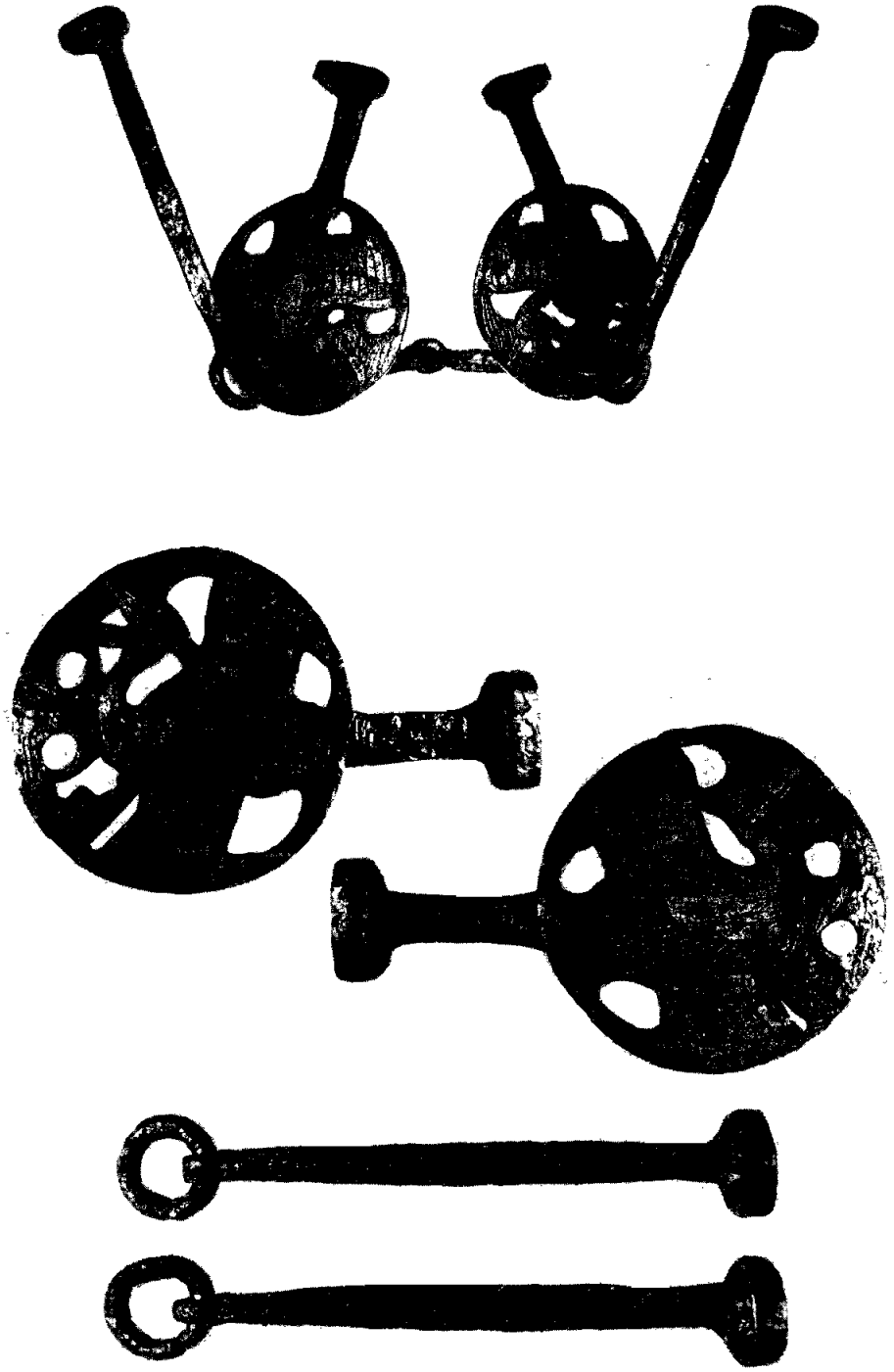


写真 4　法住寺殿跡轡

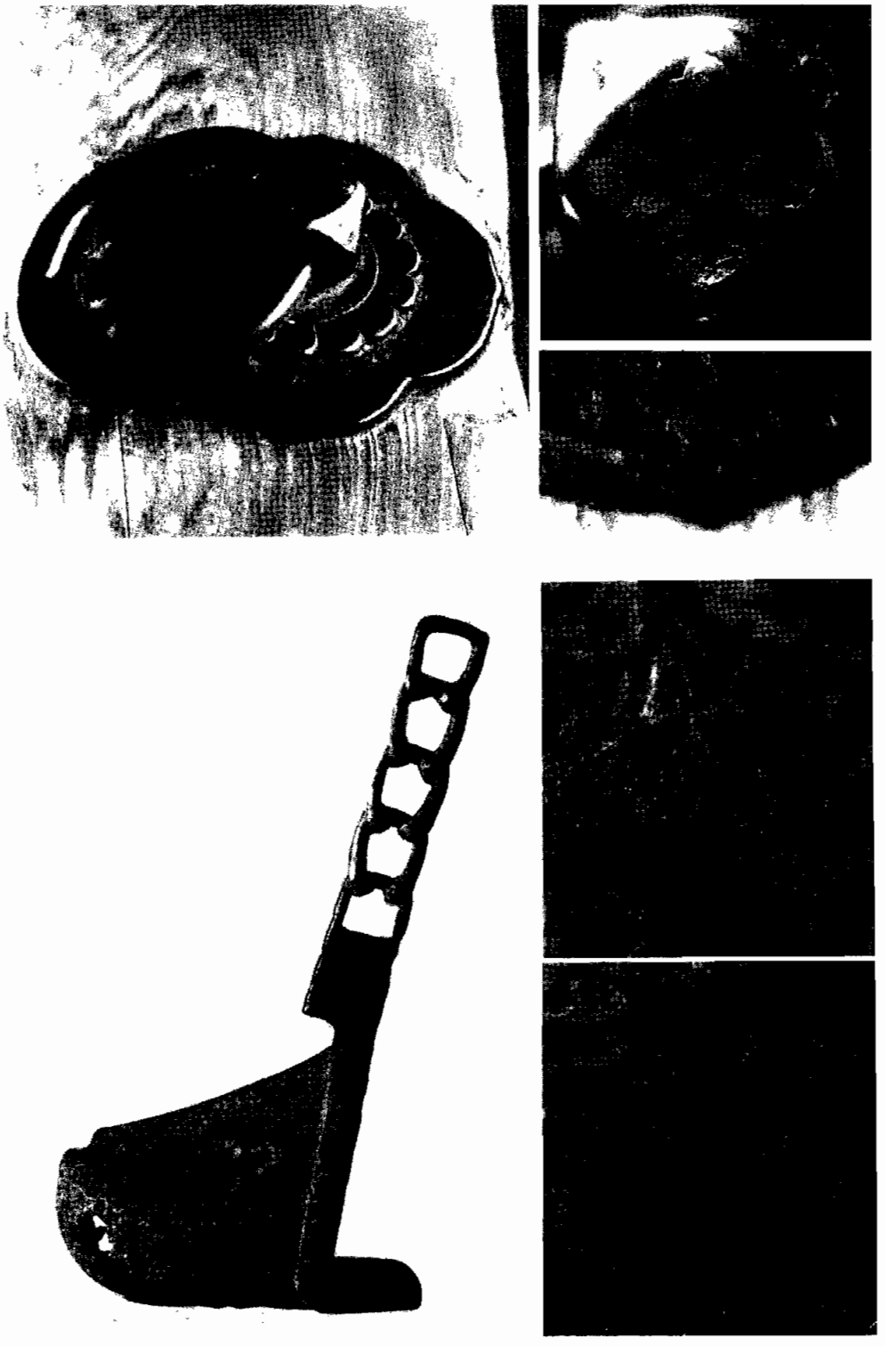


写真５　平等院阿弥陀堂扉留金具（上）と手向山神社壺鐙（下）

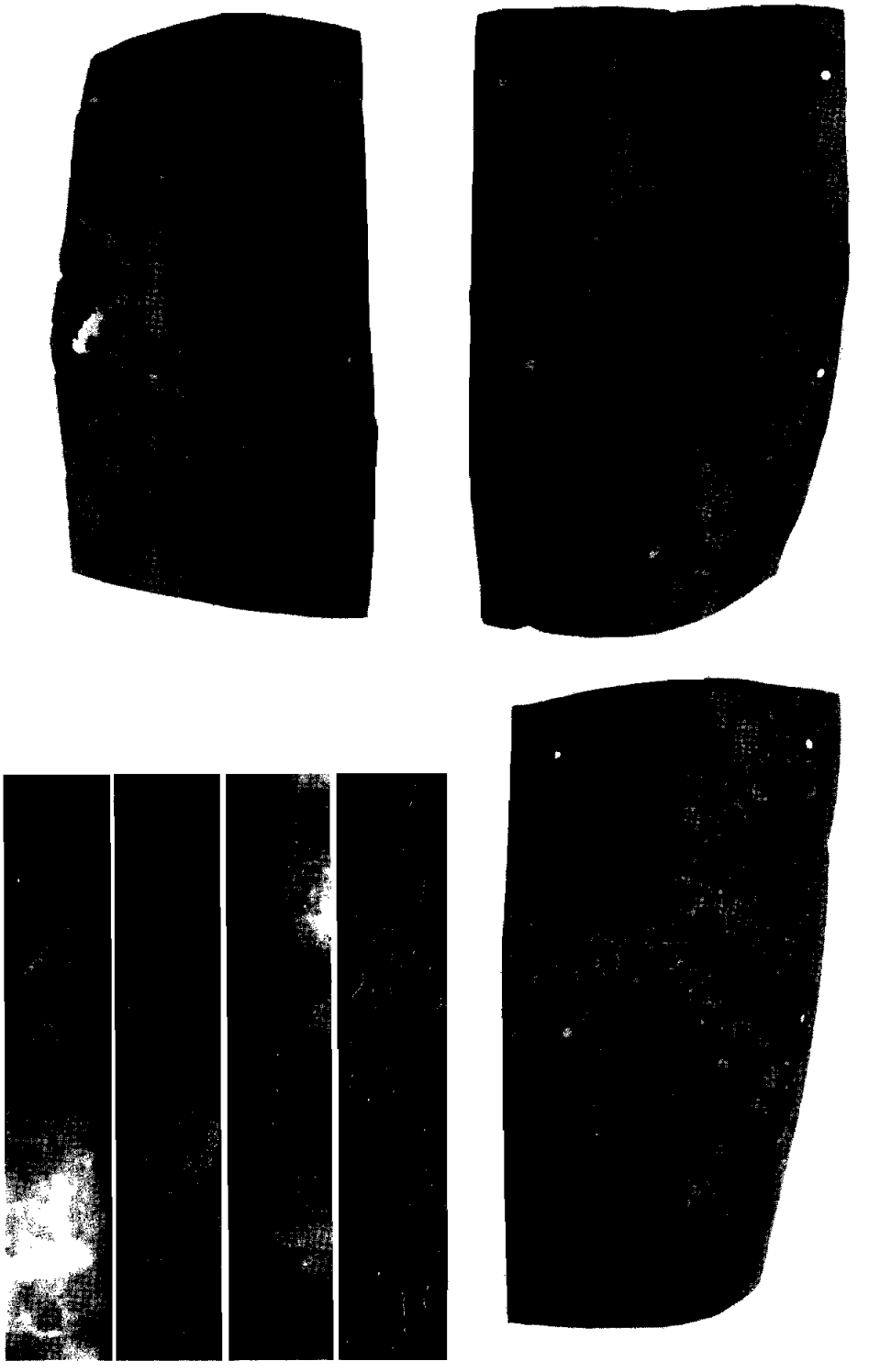


写真６　大山寺厨子銘板(右上１枚目、左上３枚目、右下４枚目、左下は文字の現状と同一部のＸ線写真)

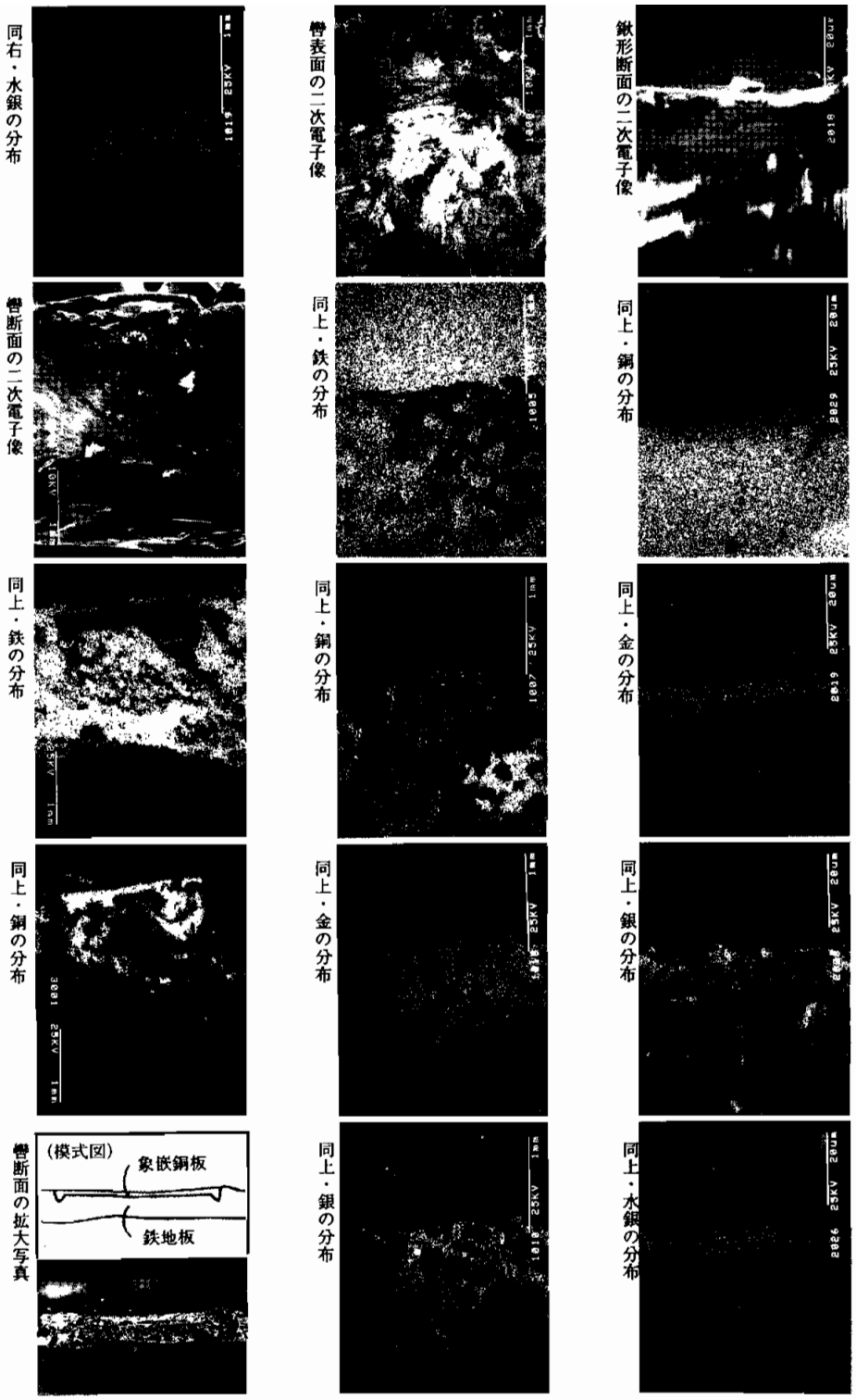


写真７　法住寺殿跡鍬形と轡のＸ線マイクロアナライザー分析および断面拡大写真(分析位置等は図10～13参照)

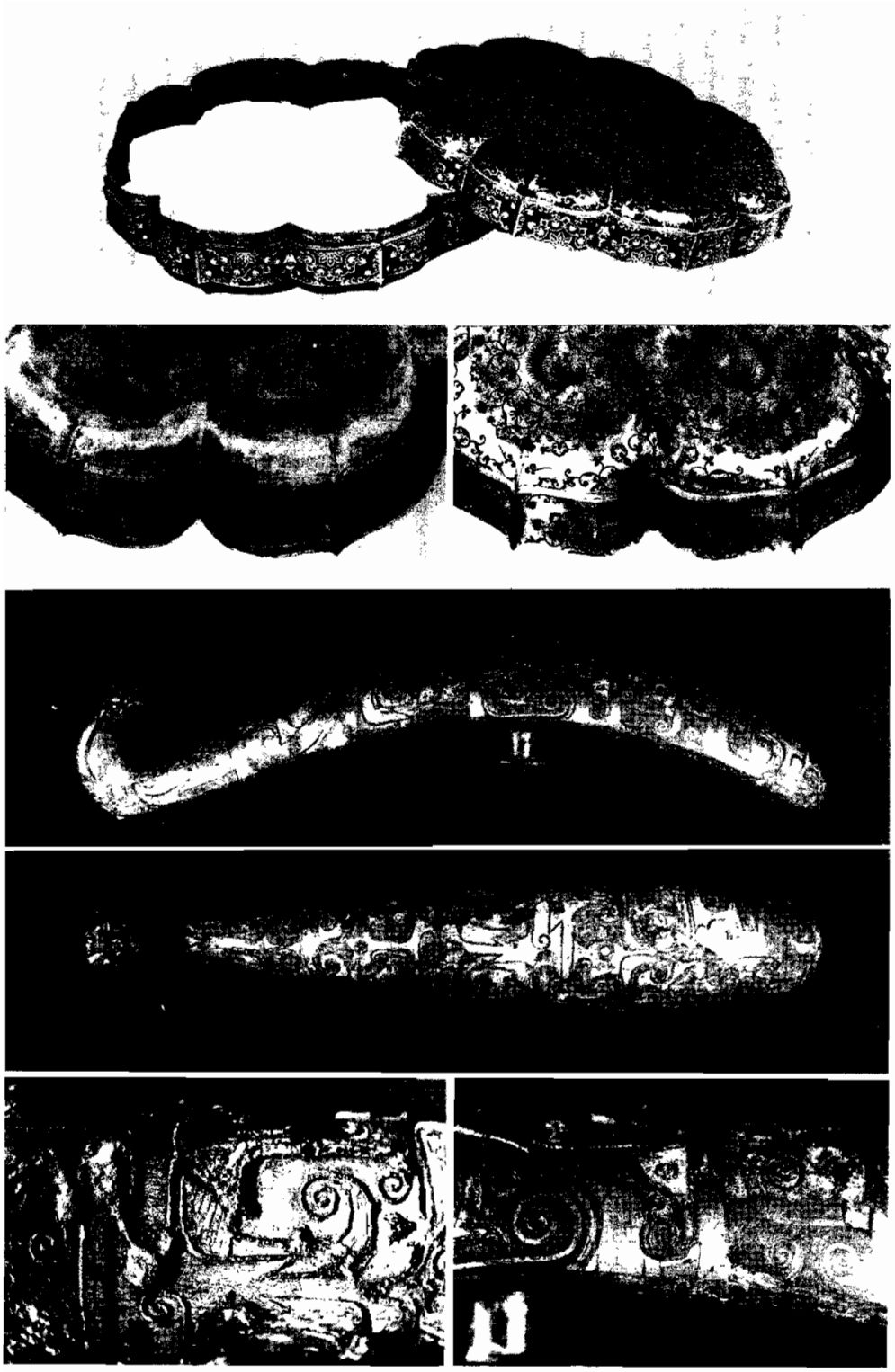


写真８　正倉院銀平脱八稜鏡箱とＸ線写真（上、宮内庁正倉院事務所編『正倉院の漆工』より複写）、金錯銀帯鉤とその細部（下、大和文華館所蔵）